

国際有機農業映画祭 2009

「大切にしたい暮らし」 11月27日(金)開場 11:30 開催時間 12:00～20:00 **客席内飲食不可**
11月28日(土)開場 9:10 開催時間 9:30～21:00※作品上映前に解説が入ります。

12:00	開会挨拶	11/27
12:05	アボン 小さい家 (2002年/フィリピン・日本) 字幕 111分	
	監督:今泉光司／制作:「アボン 小さい家」製作上映委員会	
	フィリピン北ルソンの山に100年前から住んでいる日系山岳民の出稼ぎ家族の劇映画です。世界中のお父さんもお母さんも、みんな子供たちのために一生懸命働いている。でも私たちは今、たくさんの生き物たちの命をもらって生きていることを忘れてています。人間が地球で生きるってどういうことだったんだろう。これは南の島の田舎に生きる家族の、現代のさまざまなテーマを盛り込んだリアルなおとぎ話絵巻です。	
休憩14分		
14:15	水になった村 (2007年/日本) 92分	
	監督・撮影:大西暢夫／企画・製作:本橋成一／制作:ポレポレタイムス社／助成:芸術文化振興基金	
	1957年、岐阜県徳山村に日本最大のダム建設の話が広まった。当時徳山村の住民は約1500人。みな次々に近隣の移転地へと引っ越していった。それでも、何家族かの老人たちが、村が沈むまで暮らし続けたいと、街から戻って来た。写真家の大西暢夫は、1992年に初めて村を訪ねて以来、ジジババたちの暮らしに魅せられ、何度も通い続けた。村には季節ごとに土地で採れるものを大切に作る暮らしの知恵や技がある。2006年秋、工事が終わり、水がたまり始めた。もう誰も村に帰ることはできない。ジジババたちの変わりゆく暮らしに寄り添った15年間の記録。	
休憩13分		
16:05	3分ビデオ 私の農と食 50分	
休憩15分		
17:10	すべては自然の贈りもの —西会津のお天気母さん— (2008年/日本) 50分	
	企画・制作:宇佐川隆史	
	「ザクロの芽が出たら、畑に種をまく季節」「ツバメが高く飛んでるから、まだ雨は降らないね」、どこかで聞いたことがあるような、懐かしい響き。“お天気母さん”こと、鈴木二三子さんの言葉です。彼女は、おじいさんが昔言っていた「天気まつわる言葉」を研究し、農業に活かしてきました。福島県西会津という自然豊かな土地で「植物や生きものを見つめ、情報に学ぶ」、その積み重ねで、今では年の初めに1年先の天候を7～8割的中率で予測出来るようになりました。その姿は、まるで動植物と会話するかのように真剣で、慈愛に満ち溢れています。	
休憩55分(夕食)		
19:00	未来を見つめる農場 (2008年/日本) 26分	
	制作・監督:内田一夫	
	埼玉県の西部に位置する小川町で現代有機農業の先駆者である金子美登さんの霜里農場の一年を追った作品です。霜里農場では、毎年農業を志す若い人たちを受け入れています。彼らは一年間寝食を共にし、金子さんの指導のもとに有機農業について実践で学んでいます。そして一年の研修の結果、見違えるように逞しくなった若者たちはそれぞれの夢を抱いて、将来の日本の農業を担うべく巣立っていきます。	
19:30	トーク「新規就農者—私が大切にしたい暮らし—」 30分	
	※トーク終了後、別会場にて交流会を予定しています。	
20:00終了		

9:30	開会挨拶	11/28
9:35	キング・コーン —世界を作る魔法の一粒— (2007年/アメリカ) 字幕 90分	
	監督・製作:アーロン・ウルフ／出演:共同制作:イアン・チャーニー、カート・エリス	
	すべての「食」はコーンに続く……。アメリカ人の体はコーンでできている。二人の青年が、アメリカ人が口にするほとんどの食品に含まれているというコーンの実態に迫る農業ドキュメンタリー。まず二人はコーンの一大産地アイオワで畑を借りてコーン生産を体験。そしてコーンの行方を追う。モノカルチャー、大規模農業、大規模畜産業、肥満、バイオエタノールなど、アメリカが抱えている問題が、コーンを通してあぶり出されていく。	
休憩15分		

11:25	多収量コメ栽培に挑むラオス農民 (2008年/ラオス) 字幕 20分	
	制作:JVC(日本国際ボランティアセンター)	
	ラオスの多くの村では、ほぼ半年近く米不足となる。JVCは、農業技術の改善により米の収穫を上げる研修を行っている。“SRI(System of Rice Intensification)”と呼ばれる「幼苗1本植え」によって米の増収を目指す。そして、費用のかかる化学肥料と農業による慣行農業から有機稲作への転換を目指して、指導とワークショップを通して農民の啓発を図る。	
11:50	ラオス 農に生きる7人 (2008年/ラオス) 字幕 42分	
	監督:トンダム・ポングピチット／制作:Sustainable Agriculture & Environment Development Association Lao Extension for Agriculture Project	
	ラオスでは、首都ビエンチャン周辺地域にはメコン川を渡ってタイの農業が流入し、北部では中国から国境を越えて農業が流入している。そうした中、SAEDA(持続的農業・環境開発協会)というラオスのNGOは、トンダムというリーダーの下、農民たちは農業や化学肥料に頼らない持続的な有機農業を推進している。開発の嵐の中、伝統的な知恵を活かした農民の実践を描いている。	
休憩48分(昼食)		
13:20	コメこそアジアのいのち (2007年/マレーシア) 字幕 52分	
	制作:Pesticide Action Network Asia and the Pacific (PAN)	
	タイ、フィリピン、インドネシア、インド、パングラデシュなど、米を主食とするアジアの各地で行なわれている様々な形の米まつわる「祭礼」の様子を通して、稲作がいかに関々の生活、歴史、文化、環境と深く結びついたものとなっているかを描いている。後半では、その人々の命の糧である米が、WTOのもとで、多国籍企業や、国家の小農民を無視した農業政策によって、人々の稲作、ひいては人々の生活に大きな脅威となっている状況を、「高収穫米」の導入や農地の収奪に対する農民たちの抵抗運動の様子や、農民リーダーの証言などを通して描き出している。	
14:17	シンポジウム「いまアジアの村では」 30分	
	アジア学院(栃木県那須塩原市)で有機農業を学んでいるホンバンさん(ラオス)とジェンウェンさん(タイ)をお招きして	
休憩15分		
15:45	みんな生きなければならない (1984年/日本) 80分	
	企画・撮影:菊地周／構成:亀井文夫	
	葉づけをやめた東京都世田谷区の大平農園の生き物たちの記録である。戦後の食料増産に、指導的役割を担ってきた大平家だったが、先代は農業禍で病死し、大平博四さん自身も失明寸前に。「昔の農業に戻ろう」という母親の一言で、土づくりに取り組む日々が始まる。「青虫が葉を喰う。鳥が虫を喰う。その糞を地面が吸い込む。それが野菜の栄養分になるのです」と語る大平さんにとって、虫も鳥も共に働く農業耕作者である。この作品は、ドキュメンタリスト亀井文夫の遺言でもある。	
休憩15分		
17:25	ビヨンド・オーガニック (2000年/アメリカ) 字幕 33分	
	監督:ジョン・グラフ 制作:Center for Urban Agriculture	
	開発の進むカリフォルニア、住宅地に囲まれた農場“フェアビュー・ガーデン”を守った若き農場主、マイケル・エイブルマンの“闘い”の記録。堆肥の臭いや鶏の鳴き声がうるさいと周辺住民から立ち退きを迫られるなか、都市農業センターとして人々が本当の食べ物に触れ、学ぶための農場経営が地域に受け入れられていく一方で、地主が住宅会社と土地売買契約を。その絶対絶命の危機にあって、CSAメンバーたちが立ち上がった。多額の寄付が集まり、農場はNPOとして維持されることに。都市農場の可能性を問う秀作。	
休憩47分(夕食)		
18:45	生きている土 (1982年/日本) 41分	
	企画:自然農法国際総合開発センター・MOAプロダクション／制作:桜映画社	
	「食」と「農」の問題は私たちの健康の中心となる問題である。この映画は、健全な作物を作り出す「生きている土」とは何かを科学的に捉え、その土づくりに取り組む須賀一男さんの自然農法の実践を描いている。工業化志向の今日の価値体系に対し、自然の力を見なおしたのものとしての貴重な報告であり、成功の記録である。同時に、画面から現代日本の農業について多くの問題点と教訓の数々を汲み取ることができる。	
休憩14分		
19:45	コミュニティの力 (2006年/アメリカ) 字幕 53分	
	制作:コミュニティ・サービス／監督:フェイス・モーガン	
	1990年のソ連崩壊によって、突然キューバに襲いかかったエネルギー危機。キューバの人たちは、それまでの機械と化学肥料に依存した慣行農業から有機農業へと転換し、危機的な状況を乗り切った。農業、工業、住宅、教育、医療、エネルギーをどう変えたのか、その根底にある発想の転換とは? 奪い合いもなく、一人の餓死者も出さずに乗り切り、人々が見出したもの“コミュニティの力”。やがてどの国も直面する化石燃料の枯渇。キューバの貴重な経験を記録したエネルギー危機克服のドキュメンタリー。	
20:43	閉会挨拶 21:00終了	